

熊本・徳永 直の会会報

第50号記念特集

2006年3月



御村春子 絵

第二十九回孟宗忌報告

第二十九回孟宗忌は、二〇〇六年二月一二日（日）、例年様式通りに行われた。徳ぶ会にも二十五名の参加があつた。来年は第三十回孟宗忌だから、何か新しいことをやろう。



徳永直文学碑 碑前祭に集まった人々



熊本近代文学館 久野啓介館長挨拶



徳永直の会会長 中村青史「工場新聞」
朗読前の解説

朗読者名は 池田さとみ
森永 浩子
吉岡 恭子
丸山 幸子
松村 直寛
の各氏



杉野健一副会長講演「1950年代の文学と徳永直」

二十八年の歴史を刻む 会報五十号の歩み

中村青史

会報創刊号は、一九七八年四月に高光義明氏編集で発行された。その冒頭は「熊本・徳永直の会」入会への「よびかけ」であった。

「徳永直の生涯と作品は、まだまだ多くの人に知られていません。徳永直の会は、徳永文学の普及や研究、資料の蒐集などの活動とともに、熊本における民主的な文学・文化運動の発展をめざしています。」として、岩本税、中村青史、前田市次郎、高光義明の世話人が連ねられている。会則案も提案されていて、年会費は千円となっている。また「徳永直没後第二十回目の命日にあたる去る二月十五日午後五時半から、熊本市黒髪区立田山登山口にある「徳永直文学碑」前で、二十数名の関係者が集まって第一回孟宗忌を開いた」といった記事も見える。そしてこの会報によると、「熊本・徳永直の会」結成の集いは、一九七八年四月二十七日（木）午後六時から、熊本市坪井四丁目の黒髪校区社協会館（旧公益質屋）で、会費千円の懇親会を兼ねて行われている。

第四号は、手書きB4用紙表一枚のコピーである。発行所は、熊本市黒髪四一四〇一 熊本大学教育学部中村青史研究室と変更になり、一九八二年二月一日付発行である。実はその前年夏、高光義明氏が脳溢血で倒れたからである。一九八四年五月八日に、意識が戻らないまま高光氏は永眠されたが、その後の会報発行は中村の担当するところとなった。だから第七号や号外が手書きのコピー

となったりするのである。

第九号は一九八二年八月一日付発行で、宮城の佐藤三千夫記念会との交流が始まったことが記録されている。また「事務局担当の中村青史が、九月から来年二月まで、内地留学で東京へ行きますので、その間の事務所を一時岩本税宅に置くことにしました」といった会告も出ている。従って、第十号は岩本税編集で一九八三年一月二〇日に発行されている。

一九八四年は、第七回孟宗忌案内の号外を含め、第十二号、第十三号と三号を出している。もともと第十三号は高光義明氏の追悼号となっている。前の年に張り切り過ぎたからでもあるまいが、第十四号は二頁会報であった。孟宗忌の様態も、さまざま変遷していて興味あるが、これについては来年が孟宗忌第三十回となるので、その時点で報告することにした。

一九九四年二月、会報第三十号が二二頁の小冊子で発行された。同年十一月には第三十一号も八頁で出ている。

第三十五号は、第二十回孟宗忌への参加も呼びかけて二〇頁の小冊子を発行した。次の三十六号は、津田道代さんを迎えての盛大な孟宗忌の報告集であった。そして徳永直生誕百年（一九九九）への予告。第三十八号は、徳永直生誕百年特集号冊子を一九九九年一月に発行した。表紙には官崎静夫さんの絵をカラー写真で飾った。生誕百年祭の様子は第三十九号に掲載、その年九月に発行している。そしてこの号から現発行所に変る。第四十九号は二〇〇五年五月発行で、木庭克敏氏追悼号でもあった。

毎号原則として写真を掲載しているが、そこに写っている人で、今は亡き人も多い。

徳永直の文学は今こそ旬

井上栄次

ライブドア事件の「ホリエモン」は今東京拘置所の独居房にいる。3畳ほどの部屋で彼は何を考えているのだろうか。徳永直の作品を差し入れてやる人は誰かいないか。差し入れてもらった本を彼は果たして読むだろうか。

私は「ホリエモン」がマスメディアによってちやほやされ、やがてブームを巻き起こしたとき、一番先に頭に浮かんだのは徳永直であり、その文学碑の碑文になっている「最初の記憶」の末尾の文章であった。それは端的に言って徳永直の文学が、「ホリエモン」の世界の対極にあるからである。「私たちはもつと労働について語らなければならぬ」(碑文の冒頭) いまこそ額に汗する人間について、また人間の尊厳について語らなければならない。毎日のテレビや新聞を見ている多くの人は、今日の世相に照らして、きつとそう思っているに違いない。小田実流に言えば「徳永直の文学は今こそ旬」である。

中村青史会長は「徳永直の選集か著作集を必ずこの熊本から出したい。東京は、もはやあてにならないから直さんの郷土熊本から必ず出そう。必ず出す。」と言っておられる。大賛成である。

ところで熊本には現在、徳永直の著書がどれくらいあるのだろうか。どれ位普及し、読まれているのであろうか。調べたものがどこかにあるのだろうか。もし無ければ、いつかは一度調べてまとめて置きたいものである。

以下は、会報50号に間に合うよう急いで調べた、近代文学館と熊本市図書館にある徳永直の著書名とその冊数である。利用状況がわからないのでなんとも言えないが、特に市立図書館の場合、もつと充実してほしいと思う。しかし、これから集めることは容易ではない。

1、熊本近代文学館友の会の馬場さんに調べていただいた同館所蔵の徳永直の著書

・赤い恋以上	初版	1	・結婚記	2
・阿蘇山		1	・工場新聞	1
・新しき出発		1	・最低の組織	1
・あぶら照り		4	・作家と生活	3
・梅と桜		2	・静かなる山々	9
・幼い記憶		1	・輜重隊よ前へ!	1
・風 初版		1	・失業都市東京	4
・がま 初版		1	・小資本家	1
・逆流に立つ男		2	・小説勉強	3
・草いきれ		4	・小説作法	1
・苦しい道		1	・新訂 唯物弁証法読本	1
・女工舎監の日記		1	・背の高い娘	4
・先遣隊		2	・戦列への道	2
・ソヴェト紀行		2	・小さい記録	2
・太陽のない街		10	・妻よねむれ	1
・他人の中		3	・短編集 長男	1
・濁流		1	・追憶	1

・土に萌える	1	・妻よねむれ	8
・東京の片隅	3	・耕治人宛はがき	1
・徳永直集(1)	1	・徳永直集(2)	1
・徳永直短編選集	1	・何処へ行く?	2
・泣かなかつた弱虫	3	・日本人サトウ	1
・能率委員会	3	・はたらく一家	8
・働く者の文学読本	3	・はたらく歴史	3
・八年制	7	・光をかかぐる人々	4
・一つの歴史	1	・ひとりだち	2
・冬枯れ	5	・文学ノート	1
・文学の旗	3	・豊年飢饉	1
・町子	2	・村の十日間	1
・村に来た文工隊	2	・約束手形3千8百円也	4
・藪の中の家	2	・唯物弁証法読本(共著)	4
・雪	1	・夜あけの風	2
・弱い強盗	1	・黎明期	3
・私の人生論	2		

註 1、数字は冊数を示す
2、雑誌等は省く

2、熊本市立図書館にある徳永直の著書及び関係図書			
・徳永直文学碑建立に	1	・太陽のない街	7
寄せて			
・我らの成果(新鋭傑作17人集)	1	・徳永直短編選集	3

・黎明期	1	・輜重隊よ前へ	1
・ひとりだち	1	・泣かなかつた弱虫	1
・一つの歴史	1	・光をかかぐる人々	1
徳永直遺稿集	1		
・藪の中の家	1	・約束手形3千8百円也	1
・東京の片隅	1	・八年制	1
・はたらく一家	1	・村に来た文工隊	1
・妻よねむれ	1	・能率委員会	1
・小説勉強	1	・失業都市東京	1
・静かなる山々	1	・幼い記憶	1
・小さい記憶	1	・草いきれ	1
・あぶら照り	1	・第二弁証法読本	1
・阿蘇山	1	・他人の中	1
・がま	1	・作家と生活	1
・ソヴェト紀行	1	・戦列への道	1
・先遣隊	1	・背のたかい娘	1
・風	1		

次に熊本市内にある有力な古書店2軒について調べた結果を記す。
これは当該古書店発行の古書目録を参考にあつたものである。尚、
書名の下の数字は2月現在の売値である。(単位は円)

1、舒文堂河島書店	
・失業都市東京	25、000
・能率委員会	2、500

・能率委員会	4、	500
・赤い恋以上	5、	000
・輜重隊よ前へ	25、	000
・はたらく一家	15、	000
・黎明期	20、	000
・風	8、	000
・八年制 新潮社再版	1、	000
・他人の中	2、	500
・太陽のない街	8、	000
・小さい記憶	2、	500
・風 桜井書店再版	1、	800
・ひとりだち	4、	000
・太陽のない街 再版	5、	000
・妻よねむれ	3、	500
・背の高い娘	3、	500
・私の小説勉強	3、	500
・冬枯れ	25、	000
2、天野屋書店		
・失業都市東京	25、	000
・光をかかぐる人々	8、	000
・他人の中	3、	800
・あぶら照り	6、	500
・新訂唯物弁証法読本	4、	500



94歳、ますます
お元気な
井上栄次さん。

以上であるが、いくら本好きの私でも簡単には手の出せない値段になっている。その最大の理由は、「本が日本中何処に行っても無いが、あっても極端に少ないことである」と店の主人は言っている。

最後に、紀伊国屋書店熊本支店に行つて調べると、幸いにして1冊だけ在庫があった。しかしそれは徳永直の著書ではなく、日本図書センター発行の「作家の自伝」シリーズの「68」「徳永直 文学的自叙伝／一つの時期」であった。標題にない「妻よねむれ」が入つていて、全281頁のこの本の70%近くを占めている一寸奇妙な編集の本であった。編解説は浦西和彦氏である。これ以外には、単行本も文庫も全て品切れで注文しても駄目だという。新潮文庫の「太陽のない街」は絶版になっていた。

以上、素人の私がかげ足で調べただけでも、中村会長の言われるように、なんとしても徳永直の著作集か選集をこの熊本から発刊しなければならぬ状況にあることが検証されたのではないだろうか。大学やその他の学校のことには知らないが、いずれにせよ、特に若い人たちに徳永の本を、いつでもどこでも気軽に読むことができるようにすること。一日でも早くその条件をつくるのが、われわれに課された重要な任務であることを痛感する次第である。

直とわたし

池田義一

徳永直と私の出会いは、学生時代に読んだ「太陽のない街」からである。これはのちに、尊敬する山本薩夫監督によって見事に映画化され、ズシリと感銘した思い出がある。

大学で、同じ熊本出身の映画監督・牛原虚彦教授のもとで映画演習を学んだわたしは、昭和三十四年、福岡のマスコミ関連に入社した。仕事としての創作活動の一方では、労働組合結成の準備から初代委員長として忠実に学習と実践を重ね、また地域の活動にも若いころを燃やした。

そのひとつに「生活に根ざした嘘の無い明るい演劇を！」と揚げて活動していた劇団・生活舞台にもスタッフとして参加した。ゴリキリー、チェホフ、真船豊、徳永直、あるいは創作劇を取り上げ、演出に当たってきた体験は得がたいものであったと今にして思う。

ある時、福岡公演で大層評判の良かった徳永直の「他人の中」を、直ゆかりの熊本でこそやろうと言う機運が持ち上がった。そこで相談を持ちかけた同じマスコミ仲間のRKK労組や労演（当時）の原田正純委員長や皆吉事務局長等の強力な支援のもと、今は無いあの図書館ホールを満杯にして熊本の皆さんに見ていただくことができた。その想い出は特に忘れがたい。その中でもわたしも一言の科白も無い、難しい女衞の役で出演した。

のちに熊本に居を移し、独立して映像制作の業務を開始することになった丁度その頃、黒髪地に徳永直の碑が建立されることになった。その時、日本共産党文化部の「赤旗ニュース」担当プロ

デューサー・龍神さんから早速「赤旗ニュース用に取材して下さい」との依頼を受け、除幕式に参加した。こうして16ミリ・カラーフィルムと音声テープによる取材原稿は、党員作家として活躍した彼のプロフィールを描いた「赤旗ニュース」として直ちに全国に発信されたのである。

そして今わたしは「熊本朗読研究会」の一員として徳永直の作品をはじめ、特に郷土熊本に縁の深い、もともとと広めていくべき価値ある著作の朗読を楽しんでいる。

私の労働二題

派遣会社

祁太一

人材派遣会社でバイトをしたことがある。学生のころではなく数年前、職場の長期休暇を利用してこつそりと、無理矢理熊本に呼んだ家族との生活費の足しになればと思い、やった。仕事は引越いや内装の手伝いがほとんどだったのだが、もともと体を動かして働くことが好きなので、肉体的にこたえることなく、面識もない同僚たちとの交流は楽しくもあり、またいろいろと得ることも多かった。ただオジサンと呼ばれ、イビられたのが苦痛だった。相手は派遣会社を介して私たちを雇った会社の人、私より少し若く、三十になろうとしていた私がバイトとして腰を低く働いていることを鼻で笑っていた。

派遣会社には様々な人が登録していた。学生、フリーター（私も

含む)、失業中の人、どう見てもかなり年配な方まで。事務でそれらの人たちのスケジュールを組むのだが、雇う側と雇われる側との間の矛盾は大きく、早朝から夜遅くまで、非常に大変そうだった。先日とある同学が、人材派遣会社に就職が決まったと教えてくれた。彼はすぐに事務の方だと説明を加えたが、彼の話を聞き数年前のことを思い出した。

農業

「農業を知らない」とは、天草の祖母が私に下した評価だ。大学の夏休みを利用して行った母の実家で、雑談中にそう言われた。

祖父を亡くして以来、一家を十数年守って来た祖母だったが、昼間は畑に出て、夜は早々に床に入るといふ生活も数年前から中断し、今は施設のベッドに横になったままだ。祖母は家を離れることができなかった。東京で働く伯父のUターンという幻をずっと頑なに信じていた。

幼少の頃からずっと、私の家族との記憶は農作業に結び付いている。私の両親はそのころ専業農家だった。まだ健在だった父方の祖母とともに、かなり大規模に農業を行っていたと思う。私は姉や弟と一緒に、延々と掘り返したジャガイモの収穫や、グリーンピースの袋づめ、サンタロウやソルダムというスモモのバックづめなどを手伝っていた。畑の脇の木の枝に渡した台で食べていた昼飯の味がなつかしい。家では他に、祖父が始めたという温州ミカンの栽培や養豚もやっていたが、前者はオレンジ輸入自由化の影響で早々に、後者も牛肉輸入自由化の影響による安価で続けていけず、借りていた広大な農地（私たちは「瀬の草」と呼んでいた）がゴルフ場に

なったこともあり、私が高校の時には父は睡眠をけずりながら長距離トラックに乗り、母もスーパーの食材売り場で働いていた。

農家に育った私は、今やベランダで花を育てることさえままならない。北京から熊本に呼んだ娘を私は、当時甥が通っていたドロ遊びなどで有名な保育園に通わせた。娘はジュツタンポでつな引きをしたり、畑をたがやしたりサツマイモを収穫したりして、全身ドロだらけになりながら毎日楽しんでた。(二〇〇六年二月末)

変る「面白い町」

—「妻よねむれ」六十年の年に—

金野文彦

二〇〇五年四月一日、登米郡八町と津山町が合併して登米(とめ)市が誕生した。このことで、徳永直がいくつもの作品で描いた登米(とよま)町は、広域市の一部になってしまった。行政区分の変化ばかりでなく、その姿は急速な変貌を遂げつつある。

準高速道路・三陸道の工事が進み、「H部落」こと東針田(ひがしはんだ)の山を大きく削っている。幸い、「丁家」はそれだが、「妻よねむれ」「がま」「夜明けの風」などの風景は思いもつかないものになってしまった。

直が東京から登米に来た時、東北本線の「S駅」すなわち瀬峰駅で乗り換え、仙北鉄道を利用した。四十年近く前に鉄道はなくなり、ローカルバスがほぼ同じ路線を通っていた。しかし、合併で市民バスとなり、瀬峰と登米を直接結ばなくなった。さらに、間近に迫った三陸道を利用した高速バスが、仙台と登米を直通で結ぶように

なつた。

結婚のため、直が登米に来た時おりたつた登米駅前は、ゆるやかな曲線から直線道路に生まれ変わろうとしている。駅舎はスレート葺きをやめ、屋根はトタンになった。駅の建物、ホームの跡と目の前の運送店の建物が、「結婚式」の當時を思い起こさせる。

一九五〇年「日本人サトウ」に触発され、その年の九月に、伊藤政夫・首藤直一郎らによつて、最初の佐藤三千夫追悼会をした本覚寺も全面的に改修した。それでも、三千夫の墓石が、彼の生地はまちがいに登米であることを証言している。

急激な変化の波を押し止めるのは難しい。それでも、往事の町を残してよみがえらせようとしている人々はいる。クルージングという形で、「彼岸」で「ヨシばあさん」たちがたたずんだ、当時の舟運と船着き場を思い出させる。とうとうと流れる北上川の堤防からは、直が眺めた東側の日根牛の山々が、日々その表情を変える。

直が松川事件救援の講演会をした旧小学校の講堂が、移築されて武道館となっている。洋式の尖塔が記念碑の様に残されている「高等女学校」・登米高校も間近だ。いずれも、「駅前」から歩いて少しの距離だ。

観光客でにぎわう「浅吉ぢいさん」の小学校も健在だ。「太陽のない街」は先帝が視たが、この小学校には、今の帝親子が観た。ここを佐藤三千夫・松岡二十世・首藤直一郎らが学び卒業したのを知っていたかどうか。

毎年の秋祭りは、登米が「城下町」であり商人町であったことや宿場と集散地として活況を呈していたことを示す、一年に一度の大行事であることがわかる。出店でにぎわうのもこの二日間、ふだん

は、車が行き交う三日町・九日町・中町なども、山車を眺めながらゆつたりと歩いていける。新聞店などが並ぶ佐藤三千夫の生まれた中町、青少年期の住まいの九日町五番地（現・七十七銀行登米支店）や土蔵造りの「竹文」などを、車に煩わされることなく遠近両方から観れる。

「町子」が行った八幡神社もそのままだ。かなりきつい脇の坂を上って行くと、広域水道施設のそばに佐藤三千夫記念碑がある。もう建立して四半世紀になる碑の前で、しぶとく呑牛忌を継続開催している。

今は亡き首藤さんの四十年にはかなわないが、この「面白い町」に通い出して二五年以上になった。私の住む町も「美里町」などと勝手に変えられたが、「東北からのレポート」に出てくる小牛田駅（ここ）の名は健在だ。私は、二五年前の初心と小牛田の名前にずっとこだわっていく。

また、登米中勤務は四年を経過しようとしている。直が「終戦」を迎えたあたりに、北上川下流の現在地に移設された登米大橋を渡らねば、学校には行けない。川の流れが、胃袋のようにふくらんだ真ん中に橋が架かっている。このふくらみは、三千夫終焉の地・ハバロフスクでの、アムール川のみくらみと同じに思える。

毎日、二・三階の窓からは、「山々」の四季の変化や、川向かいの三千夫碑のある通称水道山がいやでも目に入る。校内で、「Mさん」の曾孫、「竹文」の子息「丁家」のお嬢さんなどと、仕事を通じて関わってきている。

だから、私にとつて登米は、「面白い町」なのである。

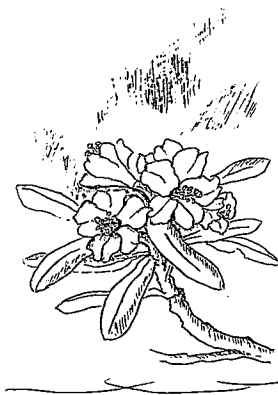
佐藤三千夫記念会事務局長（二〇〇六年二月二六日稿）

孟宗忌に寄せて

坂本 美津子

望郷の山河をつつむささめ雪
 碑にちらちら雪の降り積む
 傘さして身を寄せ合える寒の菊
 碑前祭立田の山に寒戻る
 竹林の風騒ぎ立つ孟宗忌
 碑表も碑裏も染めし落椿
 立田山一氣に駆ける日永かな
 初音きくガラシア眠れる四つ御廟
 酌む酒に花の雫をしたたらす
 春愁や吐息で曇る窓硝子
 消しゴムで消せないものに春灯し
 パーモンドカレーとろける子供の日
 焼酎の香の馥郁と五月来る
 螢火の仄めき甘き風生るる
 濃く淡く彩を織りなし舞ふ螢
 螢火の名残りに更けてゆく忌日
 山藤の垂れ下りたる仰松軒
 花合歓の薄紅色が褪せぬ間に
 梅雨じめり寺苑の長き石畳
 夏至の風びたりと絶えし供養塔
 谷深く厄皿授ぐる朱夏の寺
 碑にスクラム組んで蝉鳴けり

かたつむり角を出したる直の碑
 聳え立つ相輪映ゆる山夕焼
 釣舟草ここより先は国境
 走り去る風追ひかけて九月果つ
 石庭の静寂に秋の移りゆく
 一步毎秋の深まりゆく山路
 山上の鉄塔光る紅葉晴れ
 人生の遥かなる旅秋深む
 得しものも失いしもあり秋は逝く
 雲漏るる日の彩添えて木の葉舞ふ
 入日彩のひと葉寄り添う文学碑
 茸さがしとつぷり浸り暮れゆく日
 高千穂の天の逆鉾露走る
 山眠るきのこも眠りより覚めず
 冬枯れの果てし野を行き山を行き
 ゆけどゆけどゆけど落葉の溪谷深し
 逝く年の日の移りゆく泰勝寺



御村春子

九州編

中村青史 作成

2006.3. 現在

立田山 「冬枯れ」

徳永直文学碑 1977.2. 建立

旧五高 「白い道」

旧黒髪村

「馬」「戦争雑記」「あまり者」(1925.6.9.11)

「麦の芽」(1930.3.『中外日報』)「北島善作さん」(1957.6『新日本文学』)

「カットされない場景」(1929.8.『大衆』)「銃後」(1932.9『日本国民』)

「残飯」の味」(1931.2『批判』短編集『戦列への道』)

「最初の記憶」(1938.10『新潮』)

「他人の中」(1939.4『新潮』)

「冬枯れ」(1934.12『中央公論』1935.5 ナウカ社 刊)

「母」(1934.1『若草』、『冬枯』所収)

「こんにゃくを売る子ども」(1947.3『泣かなかった弱虫』)

「イネちゃん」(1942.8『をさない記憶』桃蹊書房)

「白い道」(1948.1『新潮』)

「葱」(1935.1『レツエンゾ』)

「写真にそえて」(1950.7『文学会議』)

「藪の中の家」(1939.5 新潮社刊)

「にがい唾」(1948.7『社会』)

「風のない日」(1948.8『新潮』)

阿蘇

「阿蘇山」

(1931.4『ナップ』)

「黎明期」

(1934.4『中央公論』)

「黒い輪」

(1957.4『群像』)

藤崎八幡宮

「カツドウシャシン」

(1946.9『小さい記録』所収)

徳永直 文学地図

旧鹿子木村

「馬」
「最初の記憶」

京町測候所

「風」

上熊本駅

「風」
(1941. 4 『日本評論』)

上通町 旧第一高女門前

「はたらく歴史」のち「幼い記憶」
と改題 (1941. 6 『中央公論』)
「喜ちゃんと勇ちゃん」
(1957. 8 『新日本文学』)

島原

「島原女」
(1933. 9 『新潮』)
「女の産地」
(1935. 9 『中央公論』)

新町

「馬」
「最初の記憶」

花畑町旧煙草専売局

「工場新聞」(1932. 8 『新潮』)
「三人」(1941. 12 『知性』)
「女工舎監の日記」(1932. 1 『新潮』)
「白い道」
「『たばこ』の話」(1948. 1 『アカハタ』連載)

洗馬橋

「坪井川」(1943. 5 『日本談義』)
「洗馬橋附近」

三角

「海の上」
(1941. 2 『日本の風俗』)

八代

「悪い夢」
(1942. 8 『をさない記憶』 桃蹊書房)

地方文化について

下川 浩 哉

地方分権ということばがある。地方分権の対義語としては中央集権が考えられる。

それでは地方文化に対して中央文化というのであろうか。これには頭をひねる。

地方といえは語感的に田舎なる語が浮かぶ。田舎に対しては都会、都市か。

こう煎じてみると「地方文化」に対しては「都市文化」が似つかわしいのではないかと私は思う。「都市文化」の言葉からは「高層ビル」「ファッション」「アミューズメント」といったイメージが浮かぶ。

形・箱もの・流行・娯楽の集大成が「都市文化」を形成し中核になつている感を私はもってしまうのである。

では「地方文化」とは何かと問われたとき私はどう答えよう。

一口で言えばその地方、その地域に根ざした独自・個性・特色ある文化とも言おうか。

たとえば、大分に定着している「一村一品」運動もまさしく「地方文化」である。

その土地伝承の〇〇神楽など郷土芸能も地方文化だし、「食文化」となればその地方の特産物を食材にした料理などいわゆる「郷土料理」も地方文化である。

ここで私は「文化」なる言葉について考えてみた。
Cultur(カルチャー)であるが、語源を調べてみると

Culturは「耕す」tureは抽象名詞「心」である。すなわち「文化」とは、「心を耕す」ことが本義であつて「形あるもの」を越える存在なのだ。

私もは、いま「八代地人」を手作りで発行している。郷土八代の「地」にあつて「人」の心を耕したいとの理想を掲げての小冊子である。会員わずか十名。一冊三百円で会員が知人友人に買ってもらっている。

会員の年齢も七十をこえている者が多く中には病身の者もいる。それでも「地方文化の一翼を担いたい」会員の切なる願いである。

義明おじちゃん

高光 睦子



叔父は私の父の弟です。父は(女一人男六人の七人兄弟の)長男、叔父は五男でした。義明という名前は叔父のすぐ上の兄の名前でしたがその子が幼くしてなくなつたので、悲しみに沈んだ両親は、次に生まれた子供にもう一度、義明と名つけたのだそうです。(画家―サルバドール・ダリと同じ話です。)

父が長男だったため様々な行事が私のうちで行われました。叔父はいつも(奥さんの)文子叔母と一緒にやってきました。仲のよい兄弟でした。

父が亡くなったあと、叔父は親戚のすべての責任を果たしてくれました。姉の結婚の日、着物姿の叔父が喜びの表情で赤いつの樽を運んでくれたこと。私の就職の為、進路先の高校の校長先生や大学の先生方に挨拶をしてくれていたこと。弟が車の免許を取りたいと思った時、まず相談したのも叔父でした。モダンな叔父は早くから車に乗っていましたから、明治生まれの母に「とんでもない。」といわれる前に叔父の力を借りながら免許を取って、めでたく母には二人で「事後承諾」だったこともありました。

家業の「昭和プリント」を営み、五人の子供たちを育てながら、親戚の誰にも暖かい視線を向け続ける叔父でした。社会的にも広く目を向けていました。厳しい闘いの日々の中でも、「いつか小説を書く。」という夢を見ておおらかに笑いながら、真実を見失うことなく様々な困難を越えていった人でした。

「おっさん、娑婆は終わったな。」七年余りの闘病生活の後に棺に入って自宅に帰った叔父の姿にいとこが声をかけました。私もお別れに棺に花を入れながらそーと見た叔父の顔・父にそっくりでびっくりしました。(父に似てると思ったことはなかったのに...)兄弟の中で一番長生きした叔父でした。

「緒方求也さんは、おっさんの友達たい。」といっていた叔父。(ほんとは?)と思いがけず聞いていた私。叔父がなくなると七七忌の法事は緒方求也さんの取り計らいでニュースカイホテルで行われました。その席で「私は実業家として生きて参りましたが、高光さんは人間として本当に、質の高い生き方をなさいました。」と挨拶され

ました。

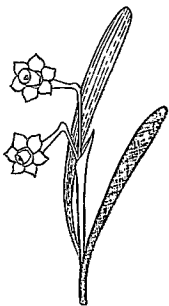
私の心の中に浮かんでくる叔父のあの日・あの時・あの様々な姿を思い出しながら「人間として本当に、質の高い生き方」をしたと評されたことをうれしく思っています。

(註) 故、高光義明氏は「徳永直文学碑をつくる会」代表であった。

聞かずや矜恃

拓植周子

命運をたふとしといへ母恋ひの少年とはの労働者なる
八角の皿を洗へば八方に水またしづく聞かずや矜恃
ことばより迅きわかれもあるだろうらふそくの火が風に消ゆれば
越前蟹置きても皿に余白ありわれの罪科なにも埋めむ
積雪のために進路を断たれたるわれゆゑわれを探しはじむる
枝の黒実啄ばみながら大鴉黒を循守のおもひもあるか
ものおもふいとまもあらず梅干しを置けば白飯たちまちあかね
無に還るまでの日月言の葉を食することく淫するのだらう
差し延ぶる驚のくちばしながければ昼の町川ふかぶかとあれ
音なしに北を指しある風向計何の名残りにわれいま在るか



不思議な縁

宮崎 静 夫

徳永直という作家の名を私が心に刻んだのは、関東軍俘虜としてシベリアにいた時である。一九四八年、私は極東のアムール河沿いの街コムソモリスクというところにいた。そこであるとき、プロレタリア作家の山田清三郎という人の話を聴いた。話しは戦争へと時代が動くころの文学活動のことで、私が初めて知ることばかり。「蟹工船」を書いた小林多喜二が官憲に囚われ、拷問の果てに殺されその遺体を引き取りに行つたことなども生々しく、徳永直の「太陽のない街」のこともそのときに聞いた。

一九四九年八月末に、私は幸い生きて帰還することができたが、職を得ることもできず、家業の畑仕事の合間に少しは本を読むこともあった。その中に徳永直の「静かなる山々」があつたことを思い出す。

そのうちに、方途も成算も無のまま、私は阿蘇から熊本本の街へ出た。それは、好きな絵を描くことであれば何にでも耐えられそうに思えたからである。

一九七五年、少しは絵の仕事も認められてか熊本日日新聞の文化欄に、熊本県内にある古寺を訪ね歩く「肥後三十三ヶ所観音巡り」の絵と文を連載することになった。

このとき、いろいろと人の世話になつたが、郷土史家で石材業の故永田日出男氏を知り、氏の主宰で地方紙『舩船』が発刊、長い交誼となつた。私が、立山山麓の徳永直文学碑に關つたのも、氏に碑の設計を任されたからである。あの堂々とした碑石も、氏の提供が

あつたからこそと私は思う。

一九九九年、私は歌人近藤芳美氏を団長にした日中歌人友好訪中団に加わり中国を訪ねた。歌人が主体の一行に歌人でもない私が参加できたのは、以前のヨーロッパへの旅や、東京での個展の折などで面識があり、誘われ参加した門外漢であつた。

この旅では、私たちは大変な歓迎を受けた。

そこでの一夕、歓迎の晩餐会が催され、出席者は、中日友好協会副会長で詩人の林林氏、中国作家協会主席委員袁鷹氏、日本文学研究会会長李芒氏

等々であつた。私には思いがけぬことで戸惑うことばかりであつたが、何故か私は李芒氏の隣席に坐らされ、恐縮した。

李芒氏は当時七十九歳、若い頃日本への留学経験があり、早稲田大学で学んだという。耳は少し不自由だが、流暢な日本語で語りかけ、次々と出される中国料理を皿にとつてくれたりもする。お互いの仕事の話しの中で、驚いたのは、徳永直の「太陽のない街」を最初に中国へ翻訳紹介をしたということであつた。想いもしていなかつただけに、徳永直は私の住む熊本の出身であること、熊本の世界の人たちで文学碑を建立、その設計を私がしたことなどを話すと、その奇偶に大いに盛りあがり、握手と乾杯を幾度もくり返し、感激を味つた。

その李芒氏も先年亡くなつたと聞いたが、健在であれば熊本へ招ぶこともできたと想うと残念だ。

シベリアと云えば、極寒や飢え、そして重労働と多くの死。軍隊組織とスターリン体制下の民主運動など、私にとっては疼きと共に思い出すことが多いが、そこでしか得られなかつたものも大きい。

あの状況の中で知った、徳永直が、何故か不意に私の前に現われて、つき動かす。だが、肝心の徳永直の作品を読んだのは僅か。若い先の時間は少ないが読まなくてはと、改めていまは思う。

(二〇〇六、二、二〇記)

いつもの「雰囲気」

岡崎信五

一年以上の間を置いて久しぶりに読書会に参加した。一年余のブランクと前回からの流れが解らないのでしばらくは緊張して聞いていた。

そのうちに、小説に対する出席者の「論評」や「時代考証」が活発に交わされるようになってきてようやく以前に感じていた「いつもの雰囲気」にとけこめるようになっていった。

話の内容は昭和初期から戦時中の労働問題であり、弾圧や貧困にあえぐプロレタリアの悲惨な情景や暗い時代背景である。

その話題の「暗さ」や「堅さ」をやわらげているのが中村先生の熊本弁を交じえたザックバランな解説であり、また出席者が自分の目で見たり経験したことを中心にした率直な批評を時には笑いながら加えていく——その雰囲気が読書会を和やかにしてくれる。

この雰囲気が、社会問題や文学に特別な素養のない私にも居場所を与えてくれるような気がしてくる。

そして会を終える頃には会報四十八号に小崎さんが記されているように「何か得をした」気になり、頭の中の財布が少し重くなったような感じで帰路につく。

これからも、あの「いつもの雰囲気」を味わい、少しでも「得をしに」できるだけ出席しようと思う。

立田の山のエゴの木の花が

杉野健一

旅の終りに 誘われて

初めて見る立田の山のエゴの木の花が

淡白の小さな鈴を淑やかに枝を広げ

新緑の木漏れ日が

その陰影をゆらめかせ 暈をつくる

この地点に立ち 動かす

ひっそりと咲き ひっそりと散る

遠い万年のいとなみ

六十年來の友とその友の友と

三人の日本のとしよりが仰向き坐っている

この花はとしよりの花だ

この世を潜り抜けてきたとしよりの花だ

耳をすますと 聞えてくる歌は

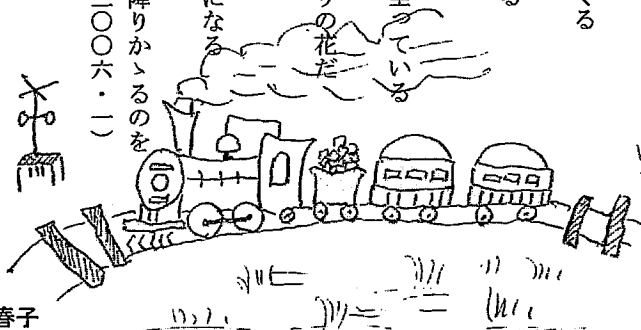
オールド・ブラック・ジョウ

あゝ このひとときぼくらは花になる

花になって ぼくは夢みる

この無垢の花びらがぼくの頬に降りかゝるのを
息をひきとる時

(二〇〇六・二)



御村春子

井上ひさし「太鼓たたいて笛ふいて」を読んで

千葉 昌 秋

井上ひさしの「太鼓たたいて笛ふいて」を読みました。林芙美子の評伝劇とも言うべき作品で、とても面白い。その中で知らなかった芙美子の姿に出会いました。

お芝居の時間設定は一九三五年から五一年まで。日中戦争（支那事変）が始まり太平洋戦争を挟んで敗戦、そして復興の時代です。芙美子は戦争末期の一九四四年から翌年の二年間、殆ど執筆活動をしていない。また疎開先（長野県・角間温泉の村落）で知人と交わした会話が警察に答められ取調べを受ける。村人からはスパイ扱い、という時期があったことを始めて知りました。

「日本はもう、この戦さに勝つ見込みはない。上手に敗けることを考えなければね」。芙美子は、このような話をしたそうです。

日中戦争が始まると芙美子は「東京日日新聞」の従軍記者（特派員）となって、日本軍とともに中国に渡ります。小学生の頃だったか、私は芙美子の従軍記を読んだ記憶があります。薄っぺらな印刷物でした。「横になって休んでいるそばを、兵隊が通って行つた。

『おい、女が寐ているぞ、日本人の女だぞ』と言ひ交わす兵隊の語が耳に入った。』そんな文章があったのを思い出します。昆虫をうたいこんだ詩も読んだ気がします。

すでに「放浪記」で人気の高かった芙美子は、その後に組織された「ペン部隊」の一員としても戦場に向かい、さらにその名を挙げました。「ペン部隊」には多くの作家が競って参加し、徳永直も熱望した一人だったと仄聞しますが、事実とすれば直はその時、どんな思いで志望したのでしょうか。

そのような芙美子が筆を返すように筆を投げ、そのうえ「日本は戦争に負ける」と明言している。この変り方はなぜ？と考えさせられました。一切のものが統制され抑圧された戦争の時期にあつて、人びとは口もとを引き締め、想いをきつく自分の胸に閉じ込めるしかなかったのです。

戦時中の作家たちの生き方はさまざまでした。船橋聖一は「起て一億」と題する長唄を発表していますし、詩人の三好達人もやはり長唄で「決戦の秋は来れり」を作っています。（山中恒・くらしの中の太平洋戦争）私も高村光太郎の戦争讃美の朗読詩をラジオで聞きました。

あの当時の作家の言動のあれこれを、ひとくくりにあげつらうことはできません。国民の殆どが「心ならずも」従わなければならなかった、いや逆らえば忽ち非難と弾圧が待ち受けていた時代でしたから。その中であつて、自分の思いをまつすぐに言葉にした林芙美子は本当に勇氣の持ち主だったと、改めて敬服しました。「異常な社会的・政治的状況の下でも、あくまでそれらを買き通す正しい勇氣と果敢な行動は、人間存在の原点なのだ」。熊大文学部教授・田中雄次氏の一文を「熊日」紙上で目にした時、芙美子こそがその人だと思ひました。

横道に外れますが、中学二年の頃、私の家に立ち寄った叔父がくれた本の中に、壺井栄の作品がありました。子供への語り聞かせの文章で、幼い頃に海辺の松原で遊んだ話でした。「馬になあれ、牛になあれ」と言いながら松の幹を掌でたたいて剥がれてきた皮の形を見せ合つてよろこぶ—そんな内容だったと思います。太平洋戦争の戦局は、日本が劣勢に傾き始めていましたが、私たち少年は「海軍」などの戦争読物にのめり込んでいました。そんな時に読んだ壺井栄の文章はとても新鮮で、子供心に感動しました。まるで乾いた

咽喉にたらし込んだ冷たい水のように、胸に沁みました。戦争の気配など全く感じさせない、微風のような文章―今でもその時の感動を思い起こします。

「私はこの戦争の悲劇を忘れてはならないと思うのです…私と同じように想いを共にしている女性の人たちに、日本の最大の悲劇であったこの戦争のこともしていた、様々な人間生活の穢せられていた暗黒な時代を書いてみたいと思っているのです」

芙美子は「作家の手帳」の中で、こう述べています。この心根を芙美子は戦争中からずっと持ち続けていて、それは作品の下敷きになつていたと私は思います。

戦後の芙美子は「晩菊」「浮雲」「めし」と、息つくひまもなく代表作を世に送り出します。五十一年六月に四十七歳で急逝するまでは走りつづけ、いや書き続けの毎日でした。

芙美子の小説には、何とも言えない魅力があります。読んでいて飽きません。

「熱い飯の上に、昨夜の秋刀魚を伏兵線にして、ムシヤリと頬ばると生きている事もまんざらではない。」（「放浪記」）

こんな文章は、芙美子だからこそ書けるのです。強い共感が湧いてきます。

戦後の作品には暗さ、侘しき、無力感が漂っているのを感じます。しかしその根底には人びとの喜びや悲しみに身近に寄り添う温かさや流れています。踏みしだかれても頭をもたげ、陽光を求めて芽を伸ばす野の花の逞しさも感じ取れることができます。

「林さんで一番おどろいたのは、お葬式ですね…おかみさんだの子供だの、買物カゴさげたりした人が、二百人くらい入ってきた…」

霊柩車が出る時は、黒山のように近所の人が見送っていました。芙美子の葬式を主宰した川端康成が追悼座談会でこう語っています。庶民とともに生きた芙美子の人となりを、如実に示した出来事でした。

徳永直もまた、庶民とともに歩んだ作家です。「太陽のない街」「他人の中」「馬」などの作品は、今なお時を越えて多くの人に読み継がれています。

芙美子には「燃えろ！」という次のような詩があります。

燃えろ！

燃えろ！

それ火だ火の粉だ

憂鬱を燃やせ！

真実の心は花火だ心だ！

馬鹿にするな

馬鹿にするな

貧しくつても

生きるのだ！

（後段省略）

芙美子は幾度となく、この詩を胸の中で口ずさみながら、筆を執つたに違いありません。

（「蒼馬を見たり」の一節）

佐藤三千夫記念会メッセージ

今季、各地に押し寄せた寒波は、六〇年前の時代の厳しさと寒々とした日本とアジアの荒野を思い起こさせます。
 しかし、春は確実にやってくる。多大の犠牲と苦闘により、民族自決と民主主義の前進の時代に入りました。徳永直は、東北・登米の住まいでその巨大な転換を迎ええました。
 新しい歴史の胎動から、「妻よねむれ」と日本国憲法が同じ年に誕生しました。いかなる悪口を浴びようとも、名作と人類理想の法は、六〇年を経てますます輝いています。
 南と北の地から、再び文学の春風を沸き起こしましょう。
 二〇〇六年二月十二日
 宮城県登米 佐藤三千夫記念会

◎会費納入者（平成十七年一月～十二月）

- 特別会員
 井上栄次、岩本 税、上野美穂子、奥山文幸、金野文彦、國米真市
 杉野健一、高光協三、中村青史、丸山幸子
 一般会員
 池田義一、泉 滋、上野桂子、植村勝明、浦田義和、大我 孝
 大野正美、緒方明子、原田裕子、海津広子、梶原定義、菊川有臣、
 木下直之、吉良 初、工藤敬一、熊懷友春、鎌田吉豊、上妻四郎、
 坂本美津子、佐田恭子、沢田博行、島寄信子、下川浩哉、平晋一郎、
 高田隆子、高光睦子、柘植周子、千葉昌秋、寺岡 葵、寺沢孝子、
 寺田 正、中田幸作、中野紀美子、西川悦子、西田光子、日高 草、
 平岡加久子、福島明子、益子 薫、光岡達之、御村春子、宮崎啓子、
 宮崎静夫、弥上是子、八浪哲郎、山戸かずえ、吉田精一、米原尋子、
 渡辺秀利、広島 正、中松健児、菅澤峰子
 寄附者
 大野正美、緒方明子、梶原定義、金野文彦、工藤敬一、下川浩哉、
 高光協三、千葉昌秋、西田光子、熊本歴史学研究会、南風堂、
 偲ぶ会

2005年度 決 算 書

2005年 1月～12月(単位:円)

収 入		支 出	
会費納入	156,000	事務所家賃 15,000×12ヶ月	180,000
(一般年会費 3,000×52口)		会報発行 No.48.49	44,100
特別会費	100,000	通信費(電話代)	40,045
(特別年会費 10,000×10口)		〃 切手、他	26,850
寄 附	80,000	孟宗忌	8,903
前年度繰越	301,466	事務用品費	1,372
		小 計	301,270
		差引残高	336,196
		(次年度への繰越金)	
合 計	637,466	合 計	637,466

平成18年3月15日

上記に相違ありません。 会計監査

西田 光子 (印)

米原 尋子 (印)

熊本・徳永直の会会則

第一条 (名称) 本会は、熊本・徳永直の会と称する。

第二条 (目的) 本会は、徳永直の作家と作品を通じ、文学を楽しみ、民族のことは常に創造、刷新することを目的とする。

第三条 (事業) 本会は、前条の目的を達成するために左の事業を行う。

- 1、徳永直文学碑を守り、孟宗忌を開催する。
- 2、熊本・徳永直の会会報を発行する。
- 3、作品研究会、作品朗読会等を行う。
- 4、その他必要と思われる事業を行う。

第四条 (組織) 本会は、会員、賛助会員及び顧問をもつて組織する。

- 1、会員は、本会の目的に賛同し年間会費を負担する。
- 2、賛助会員は、本会の活動を賛助し、応分の経済的援助を行う。
- 3、顧問は、本会の育成発展に寄与し、会長が推薦したものとす。

第五条 (役員) 本会に次の役員を置く。

- 1、会長 一名
- 2、副会長 一名
- 3、会計 一名
- 4、会計監査 一名
- 5、評議員 若干名
- 6、顧問をおくことができる。

第六条 (会議) 本会は、次の会議をもつ。

- 1、総会
- 2、評議員会
- 3、その他臨時総会

第七条 (会計)

- 1、会計年度は一月から十二月とする。
- 2、会員の会費は当年年間三、〇〇〇円とする。
- 3、会費は必要に応じて変更することができる。
- 4、会計報告は会報誌上にて行う。

第八条 (事務局) 本会は、左の事務所を置く。

〒八六〇一〇八五五 熊本市北千反畑町五一十三 さろんど・漱雲
 TEL・FAX〇九六一三四三二一〇〇七二
 郵便振替 〇一九四〇一三一四九八 熊本・徳永直の会

付則

- 1、この会則は、一九九九年一月より施行する。

事務局だより

▽岩本税氏が二月二十七日に心臓バイパス手術をした。入院が二月六日だったので、孟宗忌にも姿が見えなかった。名調子の司会が開けなくて寂しい限りであった。しかし術後の経過は良好で、三月七日に見舞った時は、室外を歩き回っておられた。

▽文学碑立ち退きの問題は、無気味な沈黙のうちに時が流れている。伐り倒された孟宗竹が、やっと元のように大きくなろうとしていたら、またもやバツサリやられた。あゝ無力なるかな風致地区法！今回は墓地公園にしたいと業者は言っていた。今のところそれは立ち消えているようだ。が、いつまた難題がふりかかるかわからない。熊本市よ、早く「文学碑の森公園」として買収して欲しい。

▽読書会は、故宮内俊介氏の遺志を継いで毎月第二土曜日を原則として続けている。午後三時から五時まで、場所は南風堂さろんど・漱雲事務所。どなたでも参加できる。

▽徳永直作品選集の刊行会を結成する時になった。発起人や賛同人を集めたり、趣意書を作ったりの行動開始だ。作品の選択や点検作業は、読書会のメンバーを中心に進めたい。

▽文学碑の泰山木が、手前に繁り過ぎて格好悪くなっていた。宮崎静夫氏が業者を雇って立派に剪定された。

▽第三十回孟宗忌を盛り上げるためにも、いろいろ皆さんのいい知恵を出して下さい。

熊本・徳永直の会

熊本市北千反畑町五一三 さろんど・漱雲
 〒八六〇一〇八五五 TEL・FAX〇九六一三四三二一〇〇七二
 郵便振替 〇一九四〇一三一四九八